飛梅 幻想

「東風吹かば…」は暗号化された恋歌なのか

制54 若林 澄治

太宰府天満宮の境内、本殿に向かって右手に御神木「飛梅」がある。

菅原道真公を慕って京の都から大宰府へ一夜にして飛んできた、と伝えられている。飛梅伝説にまつわる道真の和歌は、拾遺(しゅうい)和歌集（1006年）に採択され、古文の教科書にも載り、広く知られている。

東風吹かば匂ひをこせよ梅の花
あるじなしとて春を忘るな

「何度読んでも愛する人への恋歌に感じる」春浅く、太宰府に住む古典文学愛好家の女性が殊更に言う。僕には持ち得ない感覚だ。道真の無念が強く滲み出る一首。梅への呼びかけが自分のことを決して忘れないでほしいという願い。定説通り、ひどくもの悲しい歌にしか聴こえない。

彼女の感性は殊の外鋭い。でも、恋歌と感じるのは何ゆえか、自分でも謂い表わせないという。何があるのか、僕はそれを解き明かしてみたいと思った。なぜなら、彼女の直感は今まで外れたことがないからだ。

歌を読み込むと、表の表現とは裏腹に、判る人だけに伝わるような秘めた意味合いの感触がある。恋歌を暗号化した和歌なのかもしれない、と感じなくもない。

この歌には撞着や背馳、と思われる個所がいくつかある。

①桜ではなく、なぜ梅なのか？

道真が生きた平安時代に、花といえば梅ではなく、桜へ趨勢(すうせい)は移っていた。道真の京の邸宅には、梅も桜も松もあった。なぜ、桜ではなく梅だったのか、撞着を感じる。

梅でなければ成り立たない道真の所以(ゆえん)があった、のではないか。

②飛梅は、発地は紅梅、着地後は白梅の謎

道真の京の邸宅、紅梅殿から飛び発った梅は紅梅だ。現在、道真の京の邸宅跡に建立された菅大臣(かんだいじん)神社に植わる「飛梅」は、確かに紅梅である。しかし、太宰府天満宮の現在の「飛梅」は、白梅だ。飛び発った地と降り立った地の花の色が異なるのは、明らかに背馳である。

種類はともかく梅そのものに道真は意味を込めた、のではないか。

③和歌の基本、修辞法（表現技法）がなぜ使われていない？

「東風吹かば…」には、平安時代の和歌に多用される修辞法が使われていない。枕詞も序詞も掛詞も縁語や本歌取りもない。現代の我々でも分かる平易な言葉、素直な表現で構成している。ただ、見て分かるのは、梅を人に見立てた擬人法だ。これは、梅に当たる立場の人だけが解る暗号になりうる。和歌の表現技法を解さない、ある人物への隠れたメッセージ、なのかもしれない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

菅原道真（845～903年）は学問に優れ、詩歌に秀でた文人貴族だ。宇多天皇の近臣になり重宝されて栄達した。非主流の家柄ながら後醍醐天皇の御代に右大臣まで上り詰めた。例のない早い出世を妬んだ上流貴族層の嫉みを買い、無実の罪で大宰府へ左遷された（901年1月）。大宰府への移動は自費で、大宰府での俸給や従者は与えられず、政務も禁じられ

太宰府天満宮の飛梅（PhotoACより）

菅大臣神社の飛梅（PhotoACより）

た。2年後、道真は衣食住もままならず窮死に追い込まれた（59歳没）。

梅の和歌は道真が大宰府に来た後ではなく、「京を発つ前」に詠んだのが大きな着眼点になるはずだ。

どこまで彼女の直感を読み解けるか分からないが、撞着や背馳を探りながら、歌の真意に迫ってみたい。

①桜ではなく、なぜ梅なのか？

万葉の時代は花と言えば梅だったが、平安時代には花は桜、花を愛でる文化は梅から桜へ移っていた。

平安時代を代表する六歌仙の一人、小野小町（9世紀前半）が詠った

花の色はうつりにけりな
いたづらにわが身世に経る
ながめせしまに

この和歌の「花」は桜を指す。小町は道真より一世代前に生きた人だが、既に人々の共通の感覚として、「花は、梅ではなく桜」だった。

道真が京の住まいで暮らしていた時、梅も桜も松も植わっていた。その中で、道真の梅への特別な愛着は生来持っていたもののようだ。

五歳で詠んだ歌は、梅の花を頬ずりしたいほど愛おしく賛美している。

梅の花紅の色にも似たるかな
阿呼がほほにつけたくぞある

十一歳の時、五言絶句の漢詩『月夜見梅花』を創り、梅の花の艶やかな香りと美しさを見事に讃えている。

月耀如晴雪　梅花似照星
可憐金鏡轉　庭上玉房馨

幼少期から、梅は最も愛した特別な花であったと分かる。道真にとって「花は、桜ではなく梅」だった。

②飛梅は、発地は紅梅、着地後は白梅の謎

源平盛衰記（13世紀中頃）には、京の住処　高辻東洞院の梅が大宰府の安楽寺（現天満宮）へ飛んで渡ったとある。松も飛んだが途中の倉敷の羽島に落ちた、桜は飛ぶ前に枯れた、とされる。実は道真は桜に対しても同趣の歌を詠んでいる（後撰和歌集）

さくら花主を忘れぬものならば
吹き来む風にことづてはせよ

［訳］　桜の花よ、主人を忘れないならば、吹いて来る風に（花が咲きましたと）言付けさせておくれ。

桜の木は主の思し召しに接し、別れの悲しみのあまり枯れたとされる。

梅は、京の紅梅殿から飛び発つ前は紅梅だが、大宰府へ降り立った後は白梅になっている。何とも妙だ。

これには後日談がある。伊勢国度会の社人　白太夫という人物（道真に仕えた老僕）が、道真を慕って太宰府に下る折、都の道真の邸宅に立ち寄り、夫人の便りとともに庭の梅を根分けして持ってきたそうだ。道真は都から取り寄せたことを伏せて、「梅が飛んできた」ということにした、ともいわれている。

この根分けした実生苗から育つ梅は、母木とは違う色の花が咲くのは普通にあることだという。太宰府天満宮にある現在の「飛梅」は京の紅梅殿から、飛んで来たのではなく、根分けした実生苗から育ったものと理解できる。

③和歌の基本、修辞法（表現技法）がなぜ使われていない？

道真の代表歌で百人一首に載る和歌がある（古今和歌集905年）。

このたびは幣も取りあへず
手向山紅葉の錦神のまにまに

「たび」は「度」と「旅」の掛詞で「今度の旅は」となり、「手向」は地名と動作の掛詞になっている。道真は和歌の修辞法を普通に使う人だとわかる。ではなおさら、愛する者たちと別れる前に詠う和歌は抒情歌であり、自分の気持ちに深い意味を持たせるよう二重、三重に修辞法を駆使しそうなものだが、梅の和歌は一切そうしていない。

修辞法をなぜ使わなかったのか、これ以上見当がつかず、行き詰まった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

現地に行けば何かわかるかもしれない。窮した僕は彼女を追うような形で、東京から太宰府を訪ねた。

大宰府政庁跡、観世音寺、天満宮へと歩く。参道の裏筋に光明禅寺、藍染川と出会う。「伊勢物語」「拾遺和歌集」など多くの和歌に詠みこまれ、能の演目でも知られているその藍染川の川辺に、ひっそりと石碑『梅壺侍従蘇生の碑』が建つのを見つけた。この時、謡曲「藍染川」が語っているこの梅壺の恋愛秘話を、初めて知ることになる。

昔、大宰府天満宮の社人が京に上った時、そこに住む梅壺という天皇のお傍近くに仕える女性と恋仲になる。しかし、社人はやがて大宰府へ戻ってしまう。残された梅壺は恋しさが募り、社人を追って遠く大宰府まで下ってくる。けれど難事があり、社人に会えない。梅壺は悲嘆にくれて藍染川へ身を投げる、という物語だ。最後に、見かねた天神様（菅原道真）が現れて、亡くなった梅壺を蘇生させるというオチがつく。

「梅壺」の名は源氏物語や今昔物語にも登場するが別の女性だ。禁中の殿舎の名で、そこに住む女御や中宮など高位の女性のことをいう。梅壺の殿舎は、清涼殿の西北、飛香舎（＝藤壺）の北にあり、南面の中庭に紅梅、白梅があるのでこの名がついた。高貴な女性ゆえ上層階級の貴族としか会うことはない。

太宰府「梅壺侍従蘇生の碑」（撮影：若林）

一方、「社人」は神社に仕えて末端の社務に従事する神職（神主、神官）で、主として下級の者をいう。

そのような二人が禁中で出逢う機会はないし、身分区別の厳格なこの時代に恋仲になる関係を持つことはありえない。僕には、この物語は何かの前例を下敷きにして作り出した伝説だ、と思われてならない。

この梅壺の物語は、道真が亡くなった後のできごとだ。この逸話こそ、道真の行跡を基にして作られた物語ではないか、と僕は察知した。

京から大宰府に下った男（社人）とそれを追ってやってくる女（梅壺）。道真の大宰府への配流と、自分を慕って追ってくる女性。「梅」を掛けて本歌取りした二つの物語の相関が成り立つ。「東風吹かば…」は、寵愛する女性に自分を追いかけて来るように仕掛けた歌、と推知できる。春になれば梅の花の匂いを主のいる所まで寄こすように呼び寄せている。

道真の正室は、島田宣来子。菅公夫人（吉祥女）と称される。道真の詩文の師の娘で、学才に秀でた女性だ。

道真にはこの時代の貴族の常として側室が何人かいた。子供の数は14人、あるいは23人ともいわれる。

菅公夫人が道真と一緒に大宰府へ行くことは朝廷に許されなかった。そればかりか、道真が大宰府へ向かった同年（901年）、奥州胆沢郡に3人の子供や従臣らとともに配流された。その地で、道真の訃報を聞いた菅公夫人は深い悲しみに病に伏し、42歳の若さでこの世を去った（906年、道真没後3年）。

道真が京の自邸で詠んだ梅の和歌は、その時最も寵愛していた側室に向けた歌だったはずだ。その側室は和歌の嗜みが薄く修辞法に詳しくない。不明にならぬよう序詞も掛詞も縁語も一切用いず、平易な言葉の暗号化した表現で寵愛する側室に届くよう、道真は詠い掛けたのだ。

梅に仮託した擬人法を、「梅の花」が自分のことだと直感した側室は、突き動かされるように後を追って、大宰府へ行ったに違いない。

しかし、軟禁状態の道真に会えたかはわからない。後に梅壺の物語がそれをなぞったのであれば、難事があって会えることはなかっただろう。

もう一人、その歌の擬人法を推し量ったのは、学才に秀でた菅公夫人だったろう。自分へ向けた歌ならば修辞法を巧みに使い、二人だけが知る思い出をなぞる趣深い和歌を詠うはずだ。そうでないのは、平易な表現でなければ理解できない人に向けて詠いかけた和歌だと知れる。

菅公夫人は自分がまもなく奥州に配流されると分かっていて、道真に寄り添えない自分に代わり、寂寥感に苛まれる夫の道真を慰撫してくれる側室に黙って託したことだろう。

「東風吹かば…」の歌は暗号化されて道真の真意が秘され、後代の人たちを千年以上欺き続けているが、寵愛された側室と菅公夫人だけは、恋歌であることを読み解いていたはずだ。そして今それはもう一人、側にいる。

（明専会委員、倉敷ふるさと大使）